HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語の会話におけるフェイスバランス調整行動に関する語用論的研究 : 自己卑下発話を中心に [全文の要約]
Author(s)	隋, 暁静
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13816号
Issue Date	2019-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/76897
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Sui_Xiaojing_summary.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　隋　　暁　静

学位論文題名
日本語の会話におけるフェイスバランス調整行動に関する語用論的研究
――自己卑下発話を中心に――

われわれは日常会話をする中で、情報伝達や指示伝達のやりとりをするが、それ以外に、良好な人間関係を保つために必要なフェイスワークに関わるやりとりもする。従来の研究では、会話参加者が良好な対人関係を維持し、お互いのフェイスを脅かさないように行う言語的配慮であるポライトネスがよく知られている。これまで、日本語のポライトネスに関する研究は数多くなされてきているが、ポライトネス理論では説明ができないこともある。例えば、会話参加者のフェイスが一方的に著しく侵害されたり、あるいは一方的に高められたりして会話参加者の間でフェイスの偏りが生じてしまう場合に、どういう言語行動をとるかについては、ポライトネスでは説明できない。

本研究は、先行研究を参考にしつつ、会話の相互作用において、会話参加者の間にはフェイスバランスが存在していることを主張し、会話の参加者のフェイスが一方的に著しく侵害されたり、あるいは一方的に高められたりして会話参加者の間でフェイスの偏りが生じてしまう場合、会話参加者間のフェイスがなるべく大きく変動させないように維持し、その不均衡な状況を均衡な状態に調整を行うことが対人関係上、理想的で望ましいと考える。

本論文は、日本語の会話におけるフェイスバランス調整行動及び話し手が自分自身を低く評価する自己卑下発話を取り上げて、語用論的な観点から考察したものである。

本研究の成果は、次の 3 点にまとめることができる。

Ⅰ：フェイスバランスという視点から日本語の会話におけるフェイスバランス調整行動に着目し、その方策、特徴及び優先性を検討し、合わせてコミュニケーション全体のあり方についても考えた。さらに、相互作用において、話し手が自身のことをより低い位置に置き、低姿勢を示すことが好まれるが、会話参加者同士が協調的に両者間のバランスを維持しながらコミュニケーションをするという対人行動の特徴をま

とめ、より広いフェイスワークとして、フェイスバランスが存在すると論証した。

Ⅱ：従来の研究は、自己卑下の定義を明確にせず、また、自己卑下と謙遜をはっきりと区別しないまま、自己卑下や謙遜について研究しているが、本研究は、自己卑下の定義を明確にし、従来議論されていなかった自己卑下と謙遜・謙譲との差異と位置づけを明らかにした。

Ⅲ： 静的（static）と動的（dynamic）な観点から、日本語の会話における自己卑下発話が持つ語用論的機能とその使用の背後にある使用動機について考察を行った。

本論文は 4 部 10 章で構成されている。第 I 部「序論」は第 1 章と第 2 章からなり、本研究の研究対象と研究目的を述べ、研究方法を確立した。

第 1 章では、本研究の研究対象を日本語の会話におけるフェイスバランス調整行動と限定し、フェイスバランス調整行動に着目し、対人関係調整の特徴及びその組織を明確にすることを本研究の目的とした。

第 2 章では、フェイスバランスという考え方について述べた上で、フェイスバランス調整行動に関する先行研究と自己卑下発話に関する先行研究を概観した。そして、本研究の出発点と研究方法を明示し、本研究の理論的枠組みとなる諸概念を述べておいた。

第Ⅱ部「フェイスバランスによる対人関係調整」は第 3 章と第 4 章からなり、日本語の会話におけるフェイスバランス調整行動について考察を行った。第 3 章では、まず、会話参加者間のフェイスバランスに影響を与える行為について検討し、より分かりやすくフェイスバランス調整行動を説明するために、評価という言語行動に注目し、会話参加者間のフェイスを不均衡にするそれぞれの言語行為の類型とそれに対するフェイスバランス調整の方策を論述した。また、フェイスが動的に変化した結果生じた不均衡状態が回復したと判断する数量的基準は設定しにくいが，これ以上のフェイスバランス調整を行う必要がないという判断，あるいは，行わないことをもって不均衡の解消，あるいは均衡の回復と扱って回復の基準を明確化していた。

第 4 章では、日本語の会話におけるフェイスバランス調整行動について検討し、その特徴と優先性について考察した。結論として到達したのは、会話参加者のどちらかのフェイスが一方的に侵害されたり、あるいは一方的に高められたりして、不均衡が生じてしまう場合に行われるフェイスバランス調整行動には、確かに優先順位が存在しているという点である。具体的には、基本的に会話参加者 A の上げられたフェイスに対して、A 自身から調整を行うのが優先的であり、会話参加者 A の下げられたフェイスに対して、他者 B から調整を行うのが優先的であるが、談話の全体から、会話参

加者間の崩れたフェイスバランスに対して、会話参加者が協調して調整し、フェイスバランスを取り戻すことから、両者間のフェイスの差があまり大きくならないように、会話参加者が協調して継続的に微調整を行いながら両者間のフェイスバランスを保とうとしていると結論づけた。さらに、話し手自身に対する否定的評価となる自己卑下発話は、フェイスバランス調整行動において強力なストラテジーとなっていることも分かった。

第Ⅲ部「自己卑下発話の分析」は第 5 章から第 9 章までとなり、自己卑下発話を取り上げて考察した。主に、自己卑下発話の定義、表現形式、自己卑下発話の使用動機と語用論的機能、及びそれに対する聞き手の反応などの点をめぐって考察を行い、その全体像を明確にした。各章における検討内容は次の通りである。

第 5 章では、自己卑下の定義を明確にした上で、日本語の会話における自己卑下発話の表現形式や、自己卑下の対象、及びその表現形式にある自己卑下した部分を誇張したり、弱めたりする要素の特徴などを考察してきた。具体的には、自己卑下とは「話し手が、会話の相手に対して、自己あるいは自分側に属するヒト／コト／モノに対して特定の基準に合わない、逸脱したものとして低く価値づけ、それを表現する言語行動」であると定義した。また、謙遜と自己卑下との差異について、謙遜は他者に対する敬意を示したり、品格を確保したりするなど、実現するべき目的を前提とする行動であるのに対して、自己卑下は単に話し手自身を低く評価する発話であり、謙遜とは根本的に異なるが、謙遜の手段として使うことができると論じた。そして、自己卑下発話の表現形式には、主に「否定的な表現の使用」、「否定的な談話標識などの使用」、及び「具体的な基準提示による自己卑下」という 3 通りがあることが分かった。加えて、従来の「褒め」や「否定的評価」の対象についての研究を踏まえながら、自己卑下の対象を①持ち物、②外見、③才能、④性格、⑤行動、⑥遂行、⑦状況、⑧身内、⑨人全体という 9 つに分類して考察を行った。さらに、自己卑下発話が発せられる際、その卑下の度合いを強調したり和らげたりする要素についても言及した。

つづいて、第 6 章では、自己卑下発話のきっかけについて考察を行った。自己卑下発話の使用には、大きく、話し手自身が自発的に発せられるものと、聞き手の発話をきっかけに使われるもの、及び話し手自身の発話をきっかけとするものに分けることができると主張し、それぞれによる自己卑下発話の使用例と分布をまとめた。また、自己卑下発話から始まる会話では一見するときっかけがないままに自発的に自己卑下を行っているように見えるが、その後の発話で予測されるフェイスバランスの不均衡化に備えてあらかじめ逆向きのフェイスバランスを用意しておくなど、予備的に自己フェイスを下げておくストラテジーがあることも分かった。そして、自己卑下発話

の多くの使用はフェイスバランスによるものであると明確にし、それがフェイスバランス調整の均衡化に使う事前調整の場合と事後調整の場合に分けて検討した。

そして、第 7 章では、第 6 章の分析に基づき、静的・動的な観点から、日本語の会話における自己卑下発話の使用動機と語用論的機能を考察した。自己卑下発話は、聞き手に対しては「配慮機能」という一次的機能を、話し手自身に対しては「防御機能」という二次的機能を有することが分かった。また、フェイスバランスという視点から動的に検討し、自己卑下発話がフェイスバランス調整のストラテジーとしてもよく使われることを考察した。そして、その使用の背後にある使用動機はそれぞれ、「謙抑」による制約、ポライトネス、フェイスバランスとなるが、さらに、その「間接的な自慢」と「相手に対する否定的評価を引き出す」という派生的な機能もあると論じた。

第 8 章では、自己卑下発話に後続する聞き手の反応に注目し、その反応の種類及びそれに関わる要素について検討した。自己卑下発話に対しては、フェイスバランスに従うように、否定や褒め、話題を一般化して合理化すること、受容拒絶など、相手の卑下に不同意を示すのがほとんどであるが、質の原理なども尊重され、嘘と見なされることは回避すべきという制約を受け、同意してからまた話題転換して相手の下降したフェイスを上げる反応も見られた。

第 9 章では、これまで議論したことに基づき、会話参加者間のフェイスバランス調整行動に関連する現象を、ポライトネスの事前調整、利益と負担の関係を踏まえた調整、及びその他の調整などの観点から整理している。

第Ⅳ部（第 10 章）は、全体のまとめと今後の課題であり、本研究を総合的に振り返った上で、残された今後の課題を確認して論を綴じている。

以上は本研究の全体の内容のまとめである。本研究の成果は、次の 4 つの面に貢献できると思われる。

まず、本研究の考えは日本語教育に応用できると考える。謙遜が美徳とされている日本文化では、例えば、お茶を進める際には、上等なものであるにもかかわらず、「粗茶ですが」と言ったり、また、相手の依頼などを引き受ける際には、「こんな私でよければ」などと言ったりするが、文化の違う外国人日本語学習者は、これらの表現を疑問に思ったり、理解しがたいと感じることがあるという。本研究は、それらを理解するための一つの端緒になるだろう。本研究は、文化の面ではなく、言語運用のストラテジーの面から自己卑下発話の使用を考察したものであるが、言語の理解と使用を通してこそ、その言語行動に反映される社会文化的な価値観への理解も容易になると考えられるからである。

次に、自分自身を低く評価する自己卑下発話は、日本語だけではなく、ほかの言語にも見られるのではないかと予測できる。本研究はほかの言語における自己卑下発話の研究に何らかの示唆を与えるものになるだろう。

そして、ポライトネスは、フェイス侵害の前の段階でどういうストラテジーをとってそのフェイス侵害の度合いを軽減するのかについての理論であって、会話参加者のフェイスが一方的に侵害されたり、あるいは高められたりした後で、その状態がそのまま続いて自動的に回復しない場合にどう対処するのかについてはあまり論じていない。本研究の考察から、会話のやりとりの展開に存在する儀礼（ritual）には、ポライトネスのほかに、会話参加者の間にはフェイスバランスも潜在的に存在していると分かった。本研究の成果はポライトネス理論に対する補充・発展にもなると思われる。

最後に、フェイスバランスという考え方は、対人関係調整においても、会話管理や談話展開の面においても１つの重要な要素であると考えられる。本研究での考察は、対人関係調整理論への検討や、会話管理そして談話展開の研究に少しでも示唆を与えることができるだろう。

今後の課題としては、会話参加者間のフェイスバランスだけでなく、それと関連するバランス行動にも目を向け、将来的には、より広いフェイスワークを検討し、対人関係におけるバランス行動におけるコミュニケーション全体のあり方を解明する必要があるとしている。